

駆け抜けたケンカ神輿

池田龍雄

自分自身が九州生まれのせいか、わたしは<九州派>の活動に、初めから他人ごとではないような特別の興味を抱いていた。

郷土意識などとは全く無縁だと思っていたのに、「九州」という言葉や文字のもつ何かがわたしをゆすぶるのか、遙かな東京に出てきてから10年余り経ったころ、なにやら関門海峡の向こうで、若い絵描たちが氣勢をあげはじめたらしい、ということを知った時には、それまでさんざん東京で前衛運動をやってきて、いささか食傷気味ではあったけれども、少なからず血が騒いだものだった。

作者たちと初めて顔を合わせたのは、たしか銀座2丁目、立派な骨董屋の2階にできた「銀座画廊」での第1回目「九州派展」（1958年）ではなかったろうか。たぶん、その時が初対面のはずなのに、なにかすでに旧知の間柄のような気分になったことが記憶の中にある。おそらく、銀座のド真ん中の画廊の床に、ドンと置かれた一升ビンの頭ごし、遠慮会釈なく飛び交う懐かしの九州弁に嬉しくなったからだろう。

なかでも桜井孝身の茶碗酒片手にまくし立てる怪気炎は痛快だった。論旨はさっぱり通じないが、そのココロは跳び石を渡るかのように軽やかに伝わってくるのだ。

いまに現代美術ちゅうのは<九州派>抜きにはあり得んようになるとよシェンシェイ!!"と、東京人の度肝を抜くような大言を、ケロリと吐いた……ような気がする。なにしろずい分昔の話だ。そのころは、美術に限らず世の中全体、戦後の余熱が残っていて、あちこちに熱い湯気が立っていたのだった。政治的にも芸術的にも「前衛」という言葉業が、大いに魅力を持っていたころである。「芸術」は一なかんずく若く

それでそのお神輿が、はたして何をぶっ倒してくれたのか、そのへんのことは、自分も九州生まれで、つい、ひいき目に見ていたせいか、あまり判然としない。新しいやつはなお更のこと、世間から放つたらかにされていたのだ。だから元っぼいデモンストレーションが有効だったし可能でもあった。

荒っぼいといえば、<九州派>についで暴れだした<ネオ・ダダ>もまた似たようなものだったろう。ただし、こちらが東京生まれなのに対して<九州派>は中央を遠く離れて出現したところに大きなハンディがあったかもしれない。昔から、中央集権的構造の続いてきたこの国では、中央から地方へ下るより、反対に地方から中央に向けて事を成すほうが逝かに大きなエネルギーが要るからだ。

「ゲイジツはバクハツダ!!」というようないい方になれば、ゲイジツはエネルギーなのである。<九州派>のエネルギーは、だから相当なものだったことになろう。あまり長

く続かなかったのも、たぶんそれが強過ぎたせいだ。いち早く、グループの中にいくつも渦ができ、互いに激しくぶつかり合っているような、ということを伝え聞いたとき、これだったら澱んで腐るひまもあるまいと、むしろすがすがしい気分で見守っていた……ように覚えている。なにしろずいぶん昔の話だから。

それにしても、〈九州派〉とは一体なんだったのだろう。ここで改めて振り返って見ると、その中味についてはどうもよくわからないのである。わたしは残念ながら例の1962年秋、最後の打ち上げ花火のように博多湾を彩ったという「英雄たちの大集会」なるものに、通知を受けたもののついに都合がつかず、参加できなかったのが断定的には言えないけれども、それは、わたしにはあたかも、あの賑やかな60年代にさきが、祭りの前夜に慌てて駆け抜けて行ったケンカ神興のように思えて仕方がない、のである。